

長崎犯科帳

永井路子

講談社版

長崎犯科帳



昭和40年 5月20日 第1刷発行 430円

著 者 永 井 路 子

東京都文京区音羽町3ノ19

発 行 者 野 間 省 一

東京都文京区大塚坂下町114

印 刷 所 豊国印刷株式会社

発行所 東京都文京区音羽町3ノ19 株式会社 講談社
電話東京(942)1111大代表
振替東京3930

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (大光堂製本)

© 1965 Michiko Nagai

目次

長崎犯科帳

みのむし

死ぬということ

青苔記

下剋上

さなだ虫

応天門始末

241	201	157	113	83	47	5
-----	-----	-----	-----	----	----	---

装
幀
田
中
岑

長崎犯科帳

長^{なが}

崎^{さき}

犯^{はん}

科^か

帳^{ちよう}

一

金の欲からではない。みつが兄の留守に二人の男連れを泊める気になったのは、そのひとりのえりあしが、はっとするほどきれいなことに気がついたからである。

「そうか、留守だったのかい。政吉さんは……そりゃあまずかったな」

中年の、久兵衛と名乗る商人は、兄の政吉がここ暫く留守だと聞くと、ひどくがっかりした顔をした。大工の政吉は近在のちょっと大がかりな普請場に手間かせぎに行つて、あと一月くらいは帰らない筈だった。

「そうかい、いや、そうかもしれないねえ。政吉さんぐれえの腕になりや、ほうぼうから頼みに来るだろうからな」

久兵衛は肯きはしたものの、まだあきらめかねている様子だった。

その間じゅう、連れの男は、二人のやりとりにもるきり無関心な表情で往來を向いて立っていた。といつて、人の往き來を眺めるのでもない。ただ自分に「顔」というものがあるから、それを往來に向けているだけだ——というような立ち方をしていた。

年のころは二十四、五だろうか。目の細いおとなしそうな、これといって特徴のない顔だち、着古したためくら縞の肩に一抱えの荷物を抱えている。

——商人でもなさそうだし、でも職人にしちゃあ、いせいが悪すぎるし……

初め、みつはそんな目で男をちらとみただけだった。

「そりゃあ、まづかったなあ」

久兵衛はそう繰返し、思いきり悪く、軒先を去ろうとはしなかった。

「いやね、じつは折入って頼みがあつてね」

久兵衛は、自分はこの土地の者ではない、肥前天草領の小間物商人だが、商用でこの長崎にもよく来て、知り合いの商家に出入りする政吉を見かけ、大分前から親しくなっている、と言った。ついこの間、嫁入り先から出戻ったみつには初めて見る顔だったが、有福な商人らしいおうような口調で久兵衛は政吉の事を語り、その腕のよさを褒めるのだった。

「で、御用はなにか仕事のことで？　——」

すると久兵衛は慌てて手を振った。

「いや、なに……それが、全く違うんだ。えらいぶしつけなんだがねえ……」

少し言いくさそうに渋ってから、実は自分達二人の宿をしてくれないかと言ひ出した。

「宿を——ですって。まだどうして？」

「うん、これには、すこし訳があつてね」

言いながら彼は顔を外の男の方へしゃくつてみせ、あの若いのは卯助^{うすけ}といって、仏師^{ぶつし}なの

だ、と言った。

「仏師？」

「そうさ、仏細工ぶさいくをするんだ。いい腕うでを持っていますね」

道理で若いにしちゃあ、いきが悪いのだとみつは思った。

「俺は腕のいい職人には惚ほれっぱくてね」

久兵衛はてれたように笑ってみせ、卯助が取引仲間の小間物商の所で地藏様を彫ほっているのを見て、すっかり気に入ってしまったのだ、と語った。聞けば、卯助は肥後の人間で、その小間物商の家に一月ほど泊りこんで、それを彫っているのだという。長い間観音様を信仰している久兵衛は、卯助の仕事ぶりをみて、自分も一つ彫って貰うつもりになった。しかし、わざわざ、自分の在所の肥前まで連れて行くのも大変だし、それに商用もまだ片づいていない。いっその事、自分が長崎にいる間に彫って貰ってしまえば簡単だ。

ところで問題は卯助の仕事場だった。

「その小間物屋に置いて貰えりゃあ世話はなかったんだが、どうも、その家は渋くてね、自分の所の仕事が終わった以上、たとえば食費を置いてでも泊ってもらうのは困るというのさ」

「……………」

「じゃあ、私の宿へ来てくれといったら、この卯助さんが嫌だというのさ。職人かたぎなんだな、宿屋じゃあ仏様は彫れねえそうだ」

久兵衛は苦笑いをしてみせたが、卯助は他人事のように表を向いたまま、ぶすつとして

いる。

「そこで思いついたのが政吉さんの所なんだ。政吉さんなら卯助さんの気持も解って貰えるだろう。いや、なに、一月もでなくていいのさ、俺が頼みたいのは、小さな観音様なんだから。まあ、十日ってとこかな。寝さして食べさせてくれればいい。お礼は充分する」

——そうね……

みつが首をかしげた時、軒先を、つい、と小さな黒いものがかすめた。

燕だった。

白い腹をみせて、くろりと宙返りをして飛びさるのを、卯助の眼がふと追った。今まで棒っ杭のように突立っていた彼が、はじめてちらとだけ首を動かしたのである。

——えりあしのきれいなひと……

そう思ったのはこのときだった。みすばらしいでたち、特徴のない顔立ちにしては、意外なほど、すっきりした色白なえりあしの持主だった。

男のえりあし——なんておかしいみたいだが、いつのころからか、みつは、そんな所で男をみるようになっていた。えりあしがへんに垢じみているのにろくな男はいなかったし、整った顔立ちで物腰が上品でも、何となくえりあしの不潔な男は、いざとなると下卑_{げび}てしつこくなるものだ。またえりあしが短かくて毛の薄い男はたいいてい気短かで女をよろこばせることを知らない……

ところが、目の前の卯助は、えりあしから耳のあたりが、はっとする程すがやかで、若さが

匂いたっている。

——まるで、はたち前の若いものみたい。

ちよっとつばを呑みこむ思いだった。だいたい、えりあしほど人の年齢の出るものはない。うぶな十七、八の男の子の中には、時としてふるいつきたいようなえりあしの持主がいるが、卯助にはそうした若さがどことはなしに残っていた。多分世間離れのした仏細工なんかに打込んで来たせいなのだろう……いつのまにかみつはもう二人を泊める気になっていた。

「その代り狭いんですよ、空いてるのはここだけだから……」

政吉の仕事場の隣の四畳半を指すと、久兵衛は大形に手をおあわせる真似をした。

「ああ、けっこう、けっこう……助かったなあ、恩に着るぜ」

大げさな喜びように比べて、渡された銭の包は軽かったが、それでもみつは満足した。

もともと男が嫌いなほうではない。いや、それどころか、婚家先を不縁になったのも、表向きは体が弱いので、ということにしてあるが、実は近所の男との密事が亭主にばれてしまったからで、

「恐れながらと訴えてみる。てめえだって、そのままの面じゃあすまねえ所だ。いたずら女は鼻削ぎのお仕置だくれえ、知らねえわけでもあるめえ」

さんざん罵られ、身一つで男やもめの兄の政吉の所へ転りこんだというわけなのである。

それから三月、ひとりぐらしをしてきたみつは卯助のえりあしを見るのがまぶしいくらいだった。

口説くとか、口説かれるとかはまだこれから先の話だ。

——世話をするだけでも楽しいじゃないの。

銭の包を懷ろにしまいながら、二十七のみつは心の中でそつと肩をすくめた。

二

が、しかし——

三日も経たないうちに、みつは、二人を泊めた事を後悔しはじめていた。

呆れかえった朴念仁ぼくねんじんの唐菱木とうへんぼく——卯助はそういうより仕様がないうような人間だったからだ。

久兵衛と一緒にいれば、その無口さも、なんとなくうぶらしくみえてほほえましかったが、一人となると卯助は無口というより偏屈へんくつに近くなった。

二日目の晩、久兵衛は出かけて留守だった。露あきの煮びたし、いかの酢味噌、吸物に尾頭つきまで奮発して、台所仕事のきらいなみつとしてはせい一杯のもてなしのつもりで持って行くと、卯助はひとり、つくねんとして、前に置いた太い木の棒をみつめていた。

「御飯よ、大した御馳走もないけど……」

ああ、とか、うう、というようなことをつぶやいて卯助は坐り直した。

食事の間、みつは傍に坐って給仕をしながら、何かと話しかけてみた。

「肥後はどこなの？」

「玉名郡」

飯を噛みながら、みつの方も見ずに、卯助はぼそりと答えた。

「玉名郡のどこなの？」

「上沖津村」

「長崎にはよく来るの？」

「いや」

「今度が初めて？」

「ああ」

「どこか見物した？」

「いや」

「ずっと仏細工してたの？」

「ああ」

「仏様を作るなんて大変だねえ」

それには答えず、卯助は吸物椀をとりあげると、がぶりと一口飲んだ。格別うまそうな顔もしない。

食事の間にみつが卯助について知り得たのは、彼は小さい時から仏師に奉公して仕事を仕込まれ、今は旅を廻って仏様を彫っているということだった。

それもみつのほうから無理に聞き出したので、卯助はほとんどああ、とか、いや、とか言う

だけだったのだが……

そのうち卯助は部屋に閉じこもって鑿のみの音を響かせ始めた。久兵衛はひどく働き者で朝早く出かけてたいてい一日じゅう帰って来ない。その間じゅう、卯助は木屑にまみれて部屋のごそごそやっているのである。みつが夕食を運んで行くと、卯助は前日みつの見た太い木の棒を少しづつ削っているところだった。

「たいへんだねえ、これで観音様を作るの？」

卯助は例によって、ああ、とか、うう、とかいうような返事をした。

「幾日ぐらいかかるの」

「わからねえ」

「これ何の木？」

卯助は返事もせずに飯碗を取りあげると、むしゃぶりついた。どうやら返事をするのがおっくうなので飯を口の中へ掻かき込んだ、という様子だった。うまいまづいは問題ではないらしい。

——ひとがせっかく作ったものを……

みつはひどく気にいらなかった。

その翌日には卯助の無愛想は更に激しくなった。みつが部屋に入っていてもてんで目もあげようとはしない。手にした木の棒はただの棒切れから、どうやら頭部と胴体らしく区別がつき始めていた。

「あれ、ずいぶん進んだじゃないの」